

あいさつ

フェリックス・ウンガー

山崎達也 訳

ヨーロッパ科学芸術アカデミーを代表いたしまして、ごあいさつをさせていただきます。また、本日はこれほど多くの皆さまに参加していただき、まことにうれしく思っております。ここピンゲンは非常に多くの伝統、つまりはヨーロッパ文化における精神のすべてが凝集しておりますが、この景勝の地においてシンポジウムを開催することはすばらしいことです。

東洋哲学研究所の川田所長には心からごあいさつ申し上げます。私たちは数年来、集中的に共同作業をしてまいりました。また本日、川田所長から池田SGI

会長と私との対談を記録した『人間主義の旗を——寛容・慈悲・対話』（東洋哲学研究所刊）および『世界が見た池田大作』（東洋哲学研究所編、第三文明社刊）の二冊の書籍をいただき、まことにうれしく思っております。

川田所長から書籍をいただいた際に、一枚の写真も見せていただきました。それは、二〇〇一年九月十五日にウィーンで行われた宗教間対話の模様を写したものです。この写真が撮られるちょうど四日前に起きた同時多発テロのような惨劇を二度と起こしてはならない、このことが実は私たちが共に目指そうとしている

ことなのです。この写真はそのことを如実に物語っています。

池田SGI会長を存じ上げからずでに数年経過しておりませんが、この間、私は妻と共に東京でたびたび池田会長にお会いさせていただきました。このことは私たち夫婦にとりまして、たいへんすばらしい経験となりました。

池田会長との出会いはつねにすばらしい光輝に満ちたものでした。それは、ひとえに池田会長が慈悲深い温かさをもって、私たち人類が抱える大きな問題を見据えていらつしやることによると思われれます。

さて本日のシンポジウムでは、統一テーマである「生と死」を中心として、人間主義、寛容そして慈悲について語られることになるでしょう。これらについては東京にて私たちは池田会長と詳細に話し合いました。そのすばらしき成果は一冊の本となって結実いたしました。

しかしながら、最も興味深かったことは池田会長とさまざまな事柄について意見を交換したことでした。

そのなかで重要な事柄はやはり寛容ということでした。そして私たちは寛容について次のような結論にいたりました。すなわち、非常にヨーロッパ的表現になりませんが、人間をその尊厳において認めるだけではなく、他者の尊厳を擁護するということにおいてのみ、私たちは寛容的な態度をとることができるといいます。

これこそが私たちの宗教間対話の核心であり、出発点でありました。そしてこの対話を、皆さまざまよくご存知であるミュンヘン大学のオイゲン・ビーザー教授がたいへん熱心にイニシアチブをとられ、さらにグラーツ大学のヴォーシッツ教授が主導されることになりました。

私たちはキリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラーム教徒そして仏教徒と宗教間対話を行ってきましたが、しかしこれからは現代社会において最も大きくなった信仰共同体すなわち無神論者とも対話をしていかなければならないでしょう。

と言いますのも、これは池田会長と同じ考えなので

すが、私たちはそれぞれの宗教の立場に立ちながらも、共同してグローバルな世界観そして価値観を持つようにならなければならないと思うからであります。それはまた、私たちの言葉で表現させていただければ、私たちの生命と地球を神の愛の贈りものとして受け入れることができるからであります。

本日私たちは、現代社会が抱えているたいへん重要な一局面に関して議論を交わすこととなります。

ここで本日のシンポジウムの基調となるべきことを話させていただきたいと思えます。先週のことですが、ローマ法王がオーストリアを訪問されました。ウィーンの王宮でのレセプションの際に、法王は人権について話されましたが、それはとりわけ無神論者に向けて、各人にはけつて奪うことのできない権利が備わっていることを呼びかけられたのであります。このことが何を意味するのかは私の講演でお話したいと思えます。

最後に私が申し上げたいことは、「橋」の建設は始まりましたが、これから必要とされるものは多くの「柱」

であるということであります。私たちの力を合わせれば、必ずできると思えます。

さて、本シンポジウムの開会をアカデミーで常用される表現で宣言させていただきたいと思えます。

「会議は開かれた」(Plenum Apertum)。

(フェリックス・ウンガー／
ヨーロッパ科学芸術アカデミー会長)
(訳・やまざき たつや／東洋哲学研究所研究員)